

- ◎ 解答は解答用紙に書くこと。(氏名は書かないこと)
 字数制限のあるものは、句読点などの記号も字数に含む。

一

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

受験番号

コミュニケーションとは

コミュニケーションという言葉は、現代日本にあふれている。コミュニケーション力が重要だという認識は、とみに高まっている。プライベートな人間関係でも仕事でも、コミュニケーション力の欠如からトラブルを招くことが多い。仕事に就く力として第一にあげられるのも、コミュニケーション力である。コミュニケーションが上手くできない人間とはつきあいたくない、一緒に仕事をしたくない、というのは一般的な感情だろう。

(A) コミュニケーションとは何か。それは、端的に言って、意味や感情をやりとりする行為である。一方通行で情報が流れるだけでは、コミュニケーションとは呼ばない。テレビのニュースを見ている行為をコミュニケーションとは言わないだろう。やりとりする相互性があるからこそコミュニケーションといえる。

やりとりするのは、主に意味と感情だ。情報伝達⇨コミュニケーション、というわけではない。情報を伝達するだけではなく、感情を伝え合い分かち合うこともまたコミュニケーションの重要な役割である。何かトラブルが起きたときに、「コミュニケーションを事前に十分とるべきであった」という言葉がよく使われる。一つには、細やかな状況説明をし、前提となる事柄について共通認識をたくさんつくっておくべきであったという意味である。もう一つは、情報のやりとりだけではなく、感情的にも共感できる部分を増やし、少々の行き違いがあってもそれを修復できるだけの【一】をコミュニケーションによって築いておくべきであった、ということである。

意味と感情——この二つの要素をつかまえておけば、コミュニケーションの中心を外す②ことはない。情報という言葉は、感情の次元をあまり含んでいない言葉だ。情報伝達としてのみコミュニケーションを捉えると、肝心の感情理解がおろそかになる。人と人との関係を心地よく濃密にしていけることが、コミュニケーションの大きなねらいの一つだ。(B) 感情をお互いに理解することを抜きにすると、トラブルのもとになる。

仕事上のやりとりで、一見、情報だけを交換しているように見えるときがある。そういった状況でも、感情面に気を配ってコミュニケーションしている人とそうでない人とは、仕事の効率や出来・不出来に違いが出る。人間は感情で動くものだ。情報交換をしているときでも、同時に感情面での信頼関係を培うことができる人は、仕事がスムーズにいき、ミスもカバーしやすい。トラブルが修復不可能にまでなるときには、必ずと言っていいほど感情の行き違いがある。コミュニケーション力とは、意味を的確につかみ、感情を理解し合う力のことである。

「感情」と「意味」の座標軸

コミュニケーションとは何かを理解しやすくするために、シンプルに座標軸で考えてみよう(図1参照)。X軸として「感情」、Y軸として「意味」をとる。意味と感情の両方をやりとりできているAゾーンはコミュニケーション良好ゾーンである。それとは対照的な左下にあるDゾーンは、意味も感情もやりとりできていないコミュニケーション不全ゾーンである。たとえば、戦争状態③というのは、このDゾーンに踏み込んでいるときだ。お互いの意思を聞き合い、相互に調整すること放棄した状態である。感情的にも、憎しみだけで向き合っていて、やりとりはない。コミュニケーションへの意志を完全に失った状態が、絶交状態、戦争状態である。

左上のBゾーンは、感情はやりとりされていないが、情報は交換されているゾーンである。しっかりと意味を共感し合う必要がある場面がここに当たる。仕事の場面では、しっかりと意味のやりとりが、何よりも大事だ。意味を取り違えれば、どんな仕事でもトラブルが起きる。顧客が要求している事柄をつかまえることに失敗すれば、当然トラブルになる。たとえばコンビニで商品を買うときは単純なので、むしろにこやかな笑顔がプラスポイントにもなる。(C) 家を建てる時や、仕事上の契約や営業など厳しい場面では、少しの「意味」の取り違えが深刻なめ事につながる④ことが頻繁にある。そのような事態をあらかじめ防ぎ、

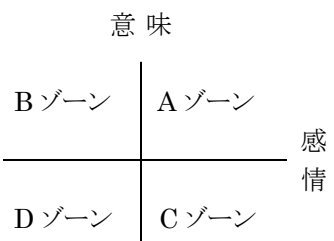


図1 コミュニケーションの座標軸

あるいは修復するためにコミュニケーション力が必要となる。どこがずれているのか、ということに敏感になることが、コミュニケーション向上の第一歩である。

自分は、相手が伝えようとしている「意味」をしっかりと受け取っているのか。こうした問いを常に自分に投げかけていると、失敗が少ない。この失敗を防ぐためには、自分で相手の言っている意味を再生して確認するのが最上の方法である。「おっしゃられているのは、……ということですね」と確認してみる。そうすることで、意味のズレをはっきりとさせることができる。意味がずれることが問題なのではない。ずれていることに気づく感覚が大事なのである。意味のズレを微妙に

南さんにそう言われても、私はいつものように立ち上がり、四本足の友達に声をかけることはしませんでした。

「帰らなくていいのか？」

「帰りたくないのよ」

「親を心配させんな」

「別にいいのよ」

私の言葉に、南さんはくすりと笑いました。

「怒られたのか？」

「怒られたんじゃないわ。喧嘩したのよ」

南さんは、笑ったままこちらを向きました。面白くもなんともないのに失礼しちゃうわ、と少しだけ思いました。

「いいか、ガキ。今から家に帰ると、お前のお母さんはいつも同じように夜ご飯を用意してくれてる。いつもと同じ、美味しいご飯だ。それを食べる時、一言だけ言うんだ。昨日はごめんねって」

「嫌よ」

「ゴウ情な奴だな」

「だって、私よりあっちの方が悪いもの」

「喧嘩の理由なんてどうせくだらないもんだろ」

南さんの言い方に、私は少しむっとしました。

「くだらなくないわ。いっつもいっつも、お父さんもお母さんも、仕事だって言って私との約束を破るの」

「仕事はお前が思うよりずっと大事なもんだ」

「分かってるわよ、そう、子どもよりずっと仕事が一番なの」

「んなことないよ」

「じゃあ、どうしていっつも私との約束より仕事を優先するの？ 今回もそう。出張だから、授業参観に来られなくなったって」

「え」

私が言い終わると、南さんが何かを言いかけたのはほぼ同時でした。正面から強い風が一度吹きました。突然の風に、私は目を瞑ってしまいます。

やがて風が私の長い髪を弄ぶのをやめ、私はゆっくりとまぶたを開いて、もう一度南さんの方を見ました。

たった数秒。風が奪ったのは、たった数秒だったはずです。

だから、そんな短い時間で何が起こったのか、すぐには分かりませんでした。

「南、さん？」

まるで、それは触ったら縮んでしまうオジギソウみたいでした。

南さんの顔から、口元から、さっきまでの笑顔が完全に消えていきました。

前触れのない南さんの変化に、私は驚きます。

「どうか、したの？」

私がきちんと訊いたのに、南さんは、答えてくれませんでした。ただ、無言で首をふるふると横に振るだけ。なんでもない、そう言いたかったのでしょうか。でも、それがなんでもなくないことくらい、子どもにでも分かりました。

「ねえ、南さん？」

「おい、奈ノ花」

南さんの声は震えていました。震える声で、私の名前を呼びました。南さんから、ガキ、以外の呼ばれ方をされたのは初めてで、私はおかしな感じがしました。どうして名前で呼ばれたのかも、南さんが震えている理由も分かりません。だから、もう一度訊きます。

「どうしたの？」

「奈ノ花……………一つ、私と、約束しろ」

南さんは、私の質問を無視しました。そしてまたも突然でした。南さんは私を体の正面に迎え、私の肩を掴みました。正面から見る南さんの前髪の奥の目は、今までに見たことがない色をしていました。

「や、約束？」

「約束。いや、私からの頼みでもいい。聞け」

「いきなり、どうしたの南さん」

「いいから聞け。一つだけだ。今から帰ったら、絶対に親と仲直りをしろ」

意味が分からない南さんからのお願い。つい首を横に振る私に、南さんは続けました。

「いいか、お前の気持ちは、分かる。寂しかっただろうし、悔しかったんだろ。それで、お前のことだから、ひどいことも言っちゃった。意^cになつて、引き下がれないのも、分かる。だけど、それでも今日、お前から謝れ。ごめんなさいって、言え」

「い、嫌よ。そんなの、大体……」

「ずっと後悔することになるんだぞ！」

南さんの風を切るような大声に、今度は私が震えました。震えて、南さんの顔を見て、もう一度、震えました。

南さんは、怒っていました。それも、どうしてか、今度はその怒りがしっかりと私に向いているように思えたのです。

何かなんだか、子どもの私にはもうさつぱりでした。そんな私を無視して、南さんは言いました。意味の分からないことを、言いました。

「後悔、してる。ずっと、後悔、してるんだ。あの時、なんで謝れなかったのかって。もう、喧嘩も出来なくなった。怒ってもらうことも出来なくなった。夜、飯

も一緒に、食べられなく、なった」

「南さん……何を、言ってるの」

「私は、もう謝ることも出来ない。だから、頼む」

南さんは目からすうっと一筋、水をこぼしました。私の知る限り、大人の涙ほど、子どもを驚かせるものではありません。

自分が泣いていることに気がついて、それを隠そうとしたのでしよう。南さんは目を無理矢理に袖で拭きました。

「いいか、人生とは、自分で書いた物語だ」

南さんは、私の口癖を真似しました。だけれども、私にはすぐにその答えが分からなかったので、いつも私が訊かれるように、「どういう意味？」と言って首を傾げました。

「推敲^{すいこう}と添^dサク、自分次第で、ハッピーエンドに書きかえられる。いいか、別に喧嘩しちゃいけないんじゃない。でも、喧嘩することと仲直りがセットだったってこと。あの時の私には分からなかったんだ。でも、お前はかしこいから、分かるはずだ。お母さんが、授業参観に行けないって分かった時、お前と同じくらい悲しかったこと。一緒に遊べないのが、お前と同じくらいに寂しいこと。それでも、お前に大好きな料理を食べさせるために働いて働いて、その中で、お母さんがお前と夜、飯を必ず一緒に食べてくれることの意味。お父さんが誕生日には必ずお前の欲しいものを買ってきてくれることの理由を、分かっているはずだ」

「……………」 (中略)

だから、考えました。いっぱいいっぱい考えました。私のちっちゃい頭を使って、たくさん考えました。

何が正しいのか、何がかしこいのか、何が優しいのか。

そして、考え抜いた私は、南さんの顔を見て頷いていました。

「分かった。約束するわ」

私の一言に、南さんの目じりに残っていた最後の一滴がこぼれました。

「ありがとう」

(住野 よる『また、同じ夢を見ていた』より)

問一、傍線部 a～d のカタカナと同じ漢字を使う熟語を、それぞれア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-----------------------|--------|------------------|-------|-------|
| a 「ゴウ情」 | 「ア ゴウ令 | イ ゴウ族 | ウ ゴウ盗 | エ ゴウ腕 |
| b 「ユウ先」 | 「ア ユウ情 | イ ユウ雅 | ウ ユウ便 | エ ユウ気 |
| c 「意 ^c 」 | 「ア ジ久 | イ 故 ^ジ | ウ ジ滅 | エ ジ面 |
| d 「添 ^d サク」 | 「ア サク除 | イ サク物 | ウ サク略 | エ サク取 |

問二、二重傍線部「……」の「の」のうち、文法的に異なるものを一つ選び記号で答えなさい。

問三、傍線部①「くすりと笑いました」とあるが、この笑い方と最も近い笑い方の表現を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア あざ笑う イ ほほ笑む ウ 苦笑する エ ほくそ笑む

問四、傍線部②「私は少しむっとしました」とあるが、その理由として最も当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 南さんが、子どもの自分ではなく、大人である親の味方をしたから。
 イ 自分の気持ちを、南さんにばかにされているような気がしたから。
 ウ 子どもだからといって、南さんが真剣に考えてくれなかったから。
 エ 南さんが、理由も聞かず一方的に自分が悪いと決めつけたから。

問五、傍線部③「正面から強い風が一度吹きました」とあるが、この「強い風」は何の予兆だと考えられるか。本文中より十五字以内で抜き出しなさい。

問一、次の各文の傍線部を、主語にふさわしい敬語に直すとき正しいものを、それぞれア～ウの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ① 先生は、学校にいますか。 【ア おります イ いらつしやいます ウ おらつしやいます】
- ② 先生が生徒の美術作品を見る。 【ア ご覧になる イ 拝見する ウ ご覧になられます】
- ③ 先生との面接に私の父が行く。 【ア 参られる イ 行かれる ウ 伺う 【

問二、次の（ ）に入る漢字を、後のア～カの中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

- ① （ ） おどる ② （ ） が立つ ③ （ ） を巻く

ア 腕 イ 足 ウ 胸 エ 頭 オ 舌 カ 口

問三、次の文章が正しいとき、一番足の速い人は誰か。当てはまるものを後のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- 「二郎君は二郎君よりも足が速く、四郎君は三郎君よりも足が遅い。三郎君は一郎君よりも足が遅く、一郎君は四郎君よりも足が速い。二郎君は四郎君よりも足が遅い。」

ア 一郎 イ 二郎 ウ 三郎 エ 四郎

問四、次の文と同じ意味の文を、後のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

「野球が得意な人は皆、サッカーかテニスが苦手だ。」

- ア サッカーが苦手な人は皆、野球が得意だ。 イ 野球が苦手な人は、サッカーが得意だ。
- ウ サッカーとテニスで得意な人は、野球も得意だ。 エ テニスが苦手な人の一部は、野球が得意だ。